

## 論文——シンポジウム「南方熊楠から見たヴィクトリア朝」

### イギリスとアジアを結ぶネットワーク ——南方熊楠と『ネイチャー』を中心に

志村 真幸

#### はじめに

南方熊楠(1867-1941)の英文論文は、1899年から1914年にかけて、『ネイチャー』に51篇が掲載された。これは史上最多ともいわれ、<sup>1</sup> その業績は世界の科学史上に大きな輝きを放っている。しかし、それでは彼が科学の進歩に大きく貢献したかと問われれば、我々熊楠研究者であっても、即座に肯定するには躊躇させられる。たとえば、熊楠と同じ頁ないし号には、アルフレッド・ウォーレス(Alfred Russel Wallace, 1823-1913)、ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)、ニールス・ボーア(Niels Bohr, 1885-1962)、エドワード・モース(Edward S. Morse, 1838-1925)らの名が並んでいる。彼らと比べては、さすがに分が悪いようにも思う。しかし、熊楠の論文がウォーレスらに劣ると考えるのはナンセンスである。現代科学の視点から点数を付けるのではなく、むしろ同時代の『ネイチャー』、科学界、イギリス社会において、熊楠の論文がどのような位置を占めていたかを確認しなければならない。そもそも、高い評価を得ていなくては、51篇も載るはずがない。

そのため、本稿では、熊楠のデビュー作である「東洋の星座」掲載の経緯、19世紀末の『ネイチャー』の誌面構成、アジア(とくに日本)関連の話題について分析することで、ヴィクトリア朝末期イギリスの科学における、熊楠やアジアの位置づけに迫りたい。

熊楠の『ネイチャー』掲載論文については、本人がくりかえし語るなどしたため、生前からよく知られていた。ただ、熊楠自身の文章に誇張が

ふくまれていたこともあり、過大評価されてきた傾向がある。この点は、1990年代からの熊楠旧邸資料の調査、さらに2005年に『南方熊楠英文論考[ネイチャー]誌篇』(飯倉照平監訳、松居竜五・田村義也・中西須美訳、集英社)で全論文が翻訳されたことで、実像があきらかになった。また、松居によって熊楠の『ネイチャー』への初期論文の実態が解き明かされてきた。<sup>2</sup> ただ、上記の翻訳で熊楠の論文が「読者投稿欄」に載ったとされたことで、必要以上に矮小化されてしまったきらいがある(なお、以下では投稿欄と表記する)。これに対して筆者は、投稿欄には最先端の科学論文が掲載され、なおかつアマチュアの投稿を受け入れていた場であると主張し、また同時代の歴史的視点から『ネイチャー』と熊楠を分析する試みをつづけてきた。<sup>3</sup> イギリス帝国の拡大によってアジアの情報が必要となったこと、熊楠が和漢の古典を自在に読みこなし、科学史的な知見として英語で報告できたことが重要だったと考えられるのである。

また本稿では、『ネイチャー』の彙報欄に注目する。科学史的観点からは等閑視されてきたコーナーだが、実際には誌面の約7割を占めていた。彙報欄に注目することで、従来とは違った『ネイチャー』、そして科学界の姿が見いだせるだろう。また彙報欄には多くのアジア関連の話題が出ている。19世紀後半の西欧科学は、イギリス帝国の拡大を背景に、インドを初めとした非ヨーロッパ世界の伝統的な知をとりこみつつ発展していったことが知られている<sup>4</sup>が、熊楠が『ネイチャー』へ投稿した19世紀末～20世紀初頭のイギリスの科学において、アジアはどのように位置づけられていたのか。また、アジアの科学はどのように『ネイチャー』に集められ、イギリス社会へと伝えられたのか。

## 1. 熊楠と『ネイチャー』

熊楠の『ネイチャー』へのデビュー作となったのは、ロンドン時代の1893年10月5日号の投稿欄に掲載された「東洋の星座」<sup>5</sup>であった。執筆のいきさつについては、1925年に書かれた矢吹義夫宛書簡(いわゆる「履歴書」)で、熊楠自身が「其時丁度ネーチュール(御承知通り英国で第一の週刊科学雑誌)に、天文学上の問題を出せし者ありしが、誰も答ふるものな

かりしを、小生一見して下宿の老婆に字書一冊を借る。極めて損じた本で、AからQ迄有て、RよりZ迄全く欠けたり。小生その字書を手にし、答文を草し、編輯人に送りしに、忽ちネーチュールに掲載されて、タイムス以下諸新紙に批評出で、大に名を挙げ<sup>6</sup>と自慢げに語っている。

辞書が本当に半分しかなかったかはわからない<sup>7</sup>し、『タイムズ』というのも記憶違いで、実際には10月9日に『ペルメル・ガゼット』の「科学欄」で紹介されたのであった。<sup>8</sup>とはいえ、インベリアル・インスティテュートで開催されたインド学会に招待されることになる<sup>9</sup>など、高い評価を得たのはまちがいない。

『ネイチャー』は1869年11月4日に創刊された。これは科学誌のなかではけっして早いものではない。イギリスの初期の科学誌としては、王立協会の『トランザクションズ』(1665年創刊)が有名だが、原則として会員によってのみ執筆され、読まれたものであった。しかし、19世紀中葉から一般読者をも対象とし、購読料によって支えられた科学誌が出現する。いわゆるポピュラー・サイエンスの流れにあるもので、新興のミドルクラスが購読層の中心をなした。彼らにとって科学は、歴史、文学、社会、芸術などと並んで、身につけるべき教養のひとつであり、わかりやすく噛み砕いて教えてくれる入門的な雑誌が必要だったのである。ただし、同時代には『リクリエイティヴ・サイエンス』(1860-62)や『ポピュラー・サイエンス・レビュー』(1877-81)など類似の一般向け科学誌が多く出版されており、『ネイチャー』はどちらかといえば後発誌であった。しかし、類似誌のほとんどが短期間で廃刊し、20世紀まで生き残れなかったのに対して、『ネイチャー』は投稿欄で科学者間の議論を活発にし、科学の先鋭化と前進を促したため、成功したとされる。

創刊者のノーマン・ロッキヤー(Norman Lockyer, 1836-1920)はウォリックシャのラグビー出身で、大学等の学歴はないものの、陸軍省に事務官として勤務のかたわら、アマチュアの天文学者として名をあげ、1869年に『ネイチャー』を立ち上げると、1871年にケンブリッジ大学講師、1885年にケンジントン太陽物理天文台所長となり、やがてはイギリス科学振興協会会長や王立協会副会長を務めるまでにのぼりつめた。天文学者としては、太陽観測に業績が多く、ヘリウムの存在を予言、命名したことで知られる。

ロッキヤーは亡くなる前年の1919年まで約50年間にわたって『ネイチャー』の編集指揮をとりつづけ、その影響は誌面に色濃くあらわれていた。熊楠は大学予備門時代から『ネイチャー』に親しんでいたようで、アメリカのアナーバー時代に定期購読を開始し、ロンドン時代、そして日本へ帰国後も、若干の中断はあるものの、1932年末に購読を停止するまで約45年間も読みつづけた。

以下、まずは『ネイチャー』の誌面構成を確認し、つづいて「東洋の星座」の掲載経緯、さらに「東洋の星座」の出た『ネイチャー』第48巻(1893年5月から10月までの半年間、5月4日号から10月26日号までの計26週分)におけるアジア関連の話題についてとりあげる。

## 2. 『ネイチャー』における誌面構成

1893年当時の『ネイチャー』は、週刊で、各号24頁(増頁となる号もある)であった。誌面は、①科学諸分野の入門的な書籍を紹介する文章(欄の名前はない。通常計2篇。依頼原稿と編集部によるものが混在)、②書評欄(Our Book Shelf。編集部によるものが多いが、依頼原稿や投稿もある)、③投稿欄(Letters to the Editor)、④彙報欄(統合的な欄の名前はない)となる。

分量的には、10月5日号を例にとれば、①が記事2篇で2頁半、②が書評2篇で半頁、③が論文6篇で3頁半、④が17頁半を占めている。④の彙報欄は、基本的に編集部による記事となり、国内外の学会報告の要約紹介、新聞や雑誌の記事の紹介、公開レクチャーの告知、天文学コラム、地理学ノート、大学および研究機関の人事の告知、各地の科学誌の紹介、研究会や学会の日程、寄贈された書籍・パンフレット・雑誌の一覧といったものから構成された。すなわち彙報欄には、『ネイチャー』編集部がはりめぐらしたアンテナにひっかかった情報が掲載されていたとみなすべきだろう。もちろんそれは購読者、さらにはイギリス社会が抱いていた関心を反映している。イギリスの科学や社会を歴史的な観点から扱うには、彙報欄を見逃してはならない。

現在の『ネイチャー』は、最先端の厳選された投稿論文の載る雑誌とい

うイメージがあるだろう。しかし、この時期の投稿欄は毎号2~3頁程度で、第48巻の場合、計176篇、各週平均約6.8篇でしかない。かならずしも主要なコーナーではなかったのである。しかし、ここでは最新の研究成果を自由に発表できた(編集部による取捨選択はある)。しかも、週刊であるためいつでも投稿でき、なおかつ議論も高速に進んだ(年に一冊しか出ない紀要などとはくらべものにならない)。先取権という考え方も広がりつつあった。ただし、後述のM・A・Bのようにアマチュアの投稿者が匿名で投稿できる状態も維持されていた。<sup>10</sup> なお、熊楠の論文のほとんどは投稿欄に掲載され、1902年7月17日号の「ピトフォラ・オエドゴニア」のみが、熊楠が送った情報を編集部がまとめるかたちで彙報欄に出た。

ともかく、彙報欄が誌面の約70%を占めていたことからすると、科学界にまつわる情報交換や周知こそが『ネイチャー』の大きな役割だったことがわかる。

### 3. 「東洋の星座」

ロッキヤーが天文学者だったこともあり、創刊当初から『ネイチャー』では天文学が大きな比重を占めた。そして1893年頃のロッキヤーは、とくに古天文学に関心をむけていた。古天文学とは、古代の記録や遺物から天文学の歴史、日食や超新星などの天体現象の記録を知ろうとするもので、その背景には、当時、エジプトやメソポタミアでの考古学的調査が進んでいたことがあった。ロッキヤーは古代エジプトやバビロニアの天文学、神殿、礼拝について、5月18日号「初期の神殿とピラミッドの建造者たち」、8月3日号「オンとテーベ天文史」、8月17日号「オンとテーベ天文史Ⅱ」とたてつけに論文を出している(オンはエジプト南部の古代都市名)。ただし、ロッキヤーが編集側だったためか、投稿欄ではなく、彙報欄に掲載されている。

そして、おそらくロッキヤーの記事に触発されたのであろう、8月17日号でM・A・Bというイニシャルのみの投稿者が質問を発する。「星をグループ化して星座とすること」と題された5条からなる質問で、1~3条はアッシリアからギリシャに至る星座の異同について教えてほしい、4条はその

ほかの民族も固有の星座をもつか、5条はそうした星座の異同を民族ごとの近親関係の判断に利用できないかというものであった。

これに対して、まずロッキヤーの回答が掲載される。9月7日号の「初期の星座」という論文で、「そう何年も前というのではない。中国と日本の文学は封印された書物であり、エジプトのヒエログリフやバビロニアの楔形文字はいまだ解読されておらず、天文観測の最初期をあきらかにするにはギリシャ文学やシリア文学に頼るしかなかった」、<sup>11</sup>しかし、いまでは研究も進んできたとして、エジプトやバビロニアの天文学や星座を紹介するものであった。内容的には、M・A・Bの質問の1~3に回答している。

つづいて、10月5日号に熊楠の「東洋の星座」が掲載される。「一東洋人の限られた知識の許す範囲ではあるが」として、前半で日本の『和漢三才図会』から中国の星座を紹介し、「北極星を中心として、天球は28の『宿』に放射状に分割されている」など、ギリシャ等とは異なると述べられる。また中国の社会制度を反映し、数字、動物、家屋、英雄などが星座となっていることが示される。後半は「中国のプリニウスと呼ぶべき段成式(800年頃)は、『西陽雜俎』にインドの文献からの抜粋を載せ、インド人たちが代表的な星宿の形をどのようなものになぞらえていたかについて記録している」<sup>12</sup>として、古代インドの星座を紹介し、中国と対比してみせる。そして最後に質問の5条に答えるかたちで、両者は独自に発生したが、よく似ており、人間の想像力の共通性を示すものだと結論づけている。ただし、あくまでも似ているのは偶然であり、M・A・Bの示唆するような利用はできないだろうとしている。<sup>13</sup>熊楠はロッキヤーにはわからなかった4と5に回答してみせたのであった。

ロッキヤーの「初期の星座」が出たときには、熊楠の「東洋の星座」の原稿はすでに編集部が届いており、<sup>14</sup>ロッキヤーが目を通していた可能性がある。ロッキヤーは翌1894年に「初期の星座」などをもとにした『天文学の黎明——古代エジプト人の神殿における礼拝と神話についての研究』という古天文学の研究書を出版する。このうち中国の星座に関する記述に「東洋の星座」からの引用らしきものがある。「最初期の中国の記録からすると、中国人は完璧に世俗的な民族で、地上のことに関してはできるだけ星々を除外するようにしたことがわかる」<sup>15</sup>と中国では星々を礼拝した形跡がな

いと述べており、これは「東洋の星座」で熊楠が、中国ではむしろ世俗の現象を天界にあてはめた<sup>16</sup>としている点を想起させる。ただし、熊楠の名は出ていない。なお、このほかにも1893年の『ネイチャー』には、古天文学に関する記事が、投稿欄、彙報欄、書評欄にあふれている。<sup>17</sup>

熊楠は、イギリスの科学界に対して、東洋の情報を提供する役割を果たすことで『ネイチャー』にデビューした。質問へ回答するかたちで掲載されたわけで、いわばインフォーマントとして価値を認められたのであった。このようにして日本から来た熊楠は、世界規模での科学の広がりにとりこまれ、同時にみずから参入していったのである。

熊楠は、こののちも第2作「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」(1893年10月12日号)、3「蜂に関する東洋の俗信」(1894年5月10日号)、4「コムソウダケに関する最古の記述」(1894年5月17日号)、5「蛙の知能」(1894年5月24日号)、6「北方に関する中国人の俗信について」(1894年11月8日号)、7「洞窟に関する中国人の俗信」(1894年11月15日号)、8「『指紋』法の古さについて」(1894年12月27日号)、9「『指紋』法」(1895年1月17日号)、10「琥珀の起源についての中国人の見解」(1895年1月24日号)と次々と論文を発表していく。いずれも近代以前の中国、日本、アジアの科学史を、古典籍を用いて紹介する内容であった。

#### 4. 『ネイチャー』における日本

つづいて誌面における日本／アジアについて見てみよう。『ネイチャー』第48巻の投稿欄、巻頭記事、書評、彙報欄のすべてを対象に調査し、関連する論文や記事を拾い出した。

まず、日本に関連する記事は9件を見いだすことができた。すべて彙報欄であった。

最初の記事は、6月8日号に出た、櫻井錠二(1858-1939)の英語版『東京帝国大学紀要 理科』(6巻1号)掲載の論文「塩類溶液からの鉄の分離温度の測定」の紹介である。櫻井は大学南校でロバート・アトキンソン(Robert William Atkinson, 1850-1929)らの指導を受け、ロンドン大学に留学したのち、東京帝国大学の化学教授となった。英文で書かれていたことで、紹

介しやすかったと考えられる。『ネイチャー』編集部には各地から科学誌や研究紀要が送られており、『東京帝国大学紀要 理科』に関しては不明だが、これも届いていた可能性が高いだろう。

同じ号の数頁あとにジョン・ペリー「日本の地震学」がある。ペリー (John Perry, 1850-1920) は、工部大学校で土木学と機械学を担当した技術者。1891年に起きた濃尾地震について報告したもので、日本地震学の父とされるジョン・ミルン (John Milne, 1850-1913) についても言及がある。ミルンは1876年に工部省の顧問として招かれ、工部省工学寮で鉱山学・地質学を教えた人物で、1880年2月22日、横浜地震に遭遇したのち、地震計を開発するなどして地震の研究にとりくみ、日本地震学会を創設したことでも知られる。ミルンはこのときイギリスに一時帰国しており、9月21日号には、日本協会の会合が27日に開催予定で、ミルンが「日本における噴火、地震の発生」について報告することが告知されている。また、ミルンが前年にウィリアム・K・バートン (William K. Burton, 1856-1899) と出版した『日本の地震』にも触れられている。ミルンとバートンが濃尾地震直後に現地に派遣されて書いたもので、1892年の第2版で根尾谷断層の写真が加えられ、有名になった。

6月22日号には、『タイムズ』から1888年の磐梯山噴火のことが転載され、8月24日号でも『タイムズ』の続報が紹介されている。同じ号に、英語版『東京帝国大学紀要 理科』(5巻4号)に出た小藤文次郎 (1856-1935) の濃尾地震に関する論文を要約したものも載っている。小藤は東京帝国大学理学部地質学科の最初の卒業生で、ナウマンなどに学び、ドイツに留学後に地質学教授となった。さらに同じ号に、ロマイン・ヒッチコック著『日本の古墳』(1891年)の紹介が出ている。ヒッチコック (Romyn Hitchcock, 1851-1923) はアメリカ出身の化学者・文化人類学者で、スミソニアン協会に在職しながら、1877年に大阪の第三中学校の英語教師となり、1877-78年に多数の古墳を写真撮影した。ほかに北海道のアイヌ調査にも携わり、スミソニアン協会の雑誌などに報告した。この3件は同じ頁に出ており、『タイムズ』、小藤、ヒッチコックと日本関連の記事が3つも並んでいたことになる。

10月12日号には、前出の小藤論文のさらなる紹介がある。10月26日号

には、エドムント・ナウマン (Heinrich Edmund Naumann, 1854–1927) のフォッサ・マグナについて扱った論文が紹介されている。ナウマンはドイツの地質学者で、1875年、明治政府に招聘を受けて来日し、東京帝国大学の初代地質学教授となった。

このように日本に関する記事には、地質学、なかでも地震と噴火に関するものが目立つ。地震国日本のイメージは、早くもこの頃からできあがっていたのであった。<sup>18</sup> 濃尾地震や磐梯山噴火といった大きなできごとがつづいたこともあるが、イギリスが地震や噴火とほぼ無縁なことが関心の高さにつながったのかもしれない。これらの調査にミルン、ペリー、バートンら関わっていた点も大きい。お雇い外国人の活動を通して、イギリスの『ネイチャー』に日本が伝えられていたのである。ミルン、ペリー、バートン、ナウマン、ヒッチコックはいずれも明治日本へ招聘されて活動した科学者であり、「科学的」な目で日本を観察し、知識や情報を西洋へもたらしたのであった。櫻井や小藤にしてもお雇い外国人たちに教育を受け、ともに研究した人物であった。当時の『ネイチャー』における日本関連の話題には、お雇い外国人という視点を落とすわけにはいかないのである。なおかつこの時期にはすでに、留学経験のある日本人科学者が、英文で論文を書くようになり、『ネイチャー』編集部の目にもとまっていたのであった。

ちなみに熊楠以前に投稿欄に論文を出した人物としては、植物学者の伊藤篤太郎 (1866–1941) がいる。イギリス留学中の1887年3月17日号に「タバシア」が掲載され、その後も3篇が出たことが知られている。しかし、伊藤について改めて調査したところ、彙報欄に10回の記事が確認され、こちらにもふくめた再評価が必要であろう。

さて、このような日本、そしてアジアの情報は、どのように『ネイチャー』へもたらされていたのか。重要なのは、19世紀後半に形成された国際郵便網であった。近代郵便の歴史は、1840年のローランド・ヒル (Rowland Hill, 1795–1879) による普通郵便制度の確立 (切手による前払い制、安価な均一料金、全国規模での郵便網整備) に始まる。これは雑誌にも多大な恩恵をもたらし、各地の購読者に容易に配達され、同時に投稿者からの原稿が安価・迅速・確実に編集部へもたらされるようになった。『ネイチャー』にしても、こうした制度を抜きにしては成立しえなかった。<sup>19</sup>

これにならって1874年に万国郵便連合がスタートする。スイス・ベルンで開かれた万国郵便大会議に22ヶ国の代表が集まり、10月9日に郵便連合創立条約が成立した。加盟国のどこへ出しても同一料金、自国の切手を貼ればよい(収入も自国)、経由国となる加盟国は無料で中継といったことが決められ、この仕組みは現在も引き継がれている。

日本は1877年に28番目の加盟国として参加し、熊楠もおおいに恩恵を受けることとなった。なお、日本からイギリスへは時期によって海路、ロシア経由、アメリカ経由などさまざまである。1902年11月には万国郵便連合の小包郵便物交換条約に加盟し、熊楠も標本をイギリスに送ったり、書籍をとりよせたりがスムーズにできるようになった。

## 5. 『ネイチャー』におけるアジア

そのほかのアジア地域については、インド15篇、中国6篇などが挙げられる。現地滞在中のイギリス人による報告、現地の英字新聞からの引用、現地人研究者による論文や著作の紹介等となる。

アジアではインド(および周辺地域)がもっとも多く、投稿欄の論文は5篇を数える。5月27日号のE・ダグラス・アーチボルド「24時間での最多雨量」でインドのチラプンジの例が挙げられ、6月22日号には同じくアーチボルドによる「セイロンにおける大小のモンスーン」が出ている。それからカンハイヤラル(Kanhaiyalal, ?-?)という人物による、7月13日号「奇妙な霰」、8月31日号「数学者へのアピール」がある(後述)。

彙報欄には10篇が確認され、5月4日号で『インド内科外科雑誌』の創刊が話題に挙げられたのに始まり、5月11日号ではインドの産業に関する報告書が紹介される。5月25日号では『パイオニア・メール』からコブラに関する迷信が紹介されている。コブラを一匹でも殺すと仲間のコブラたちが集まってきて復讐するというもので、実際にイルダートンというイギリス軍人が咬み殺されたとある。7月27日号では前述の「24時間での最多雨量」に対して、『インディアン・プランターズ・ガゼット』からデラ・ドゥーンでのさらなる豪雨を伝える記事が転載されている。8月10日号には、無署名記事「バルーチスターンの地震」という1892年12月に起きた大地震を写

真付きで紹介したものがある。同号にはカルカッタの園芸雑誌から、日本からの桑の導入の失敗についてもとりあげられている。8月31日号には、古代インドから地中海世界へ琥珀が輸出されていたのではないかとドイツの学会報告が紹介され、9月21日号では『セイロン・オブザーヴァー』からコロomboに動物園ができた件、同じ頁に1892年度のインド測量についての報告も転載されている。10月19日号には、フランシス・ゴルトンの「インド軍における指紋」が出ている。

中国関連は、投稿欄に4篇、彙報欄に2篇である。投稿欄から見ていくと、5月4日号にスカーチリー「1893年春の香港の寒波、その影響」があり、5月25日号にチャールズ・A・ノーコックの「北シナ海の気象状態」が出ている。ノーコックは海軍のカロライン号に乗船していた人物で、香港から投稿している。なお、北シナ海とは、現在の東シナ海付近に相当するようだ。そして、熊楠の「東洋の星座」と「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」(10月12日号)となる。彙報欄には、8月10日号に上海近郊で気象学協会が設立されたことが出ているのと、8月17日号で『ハンザ』から中国近海の台風について紹介されたものとなる。

これ以外のアジアの話題としては、5月4日号の彙報欄にビルマ産の寶石についての記事が確認できる。

以上からすると、日本が地震と噴火、中国が気象に偏っていたのに対して、インドの話題の多様性が指摘できるだろう。イギリス支配下にあったこと、現地在住イギリス人による報告が本国にもたらされていたこと、多数の英文新聞・雑誌が発行されていたことなどが原因と考えられる。

このようにしてアジアの科学は『ネイチャー』を介して、イギリスへと伝えられていた。ただし、ネットワークとはいっても、イギリスとアジア各地を個別に結ぶもので、横のつながりはなかった。その点で熊楠が日本、中国、インドと、いくつもの地をまたにかけて論文化していたことは注目されよう。

## 6. アジアの「不思議」

1893年7月13日号の投稿欄に「奇妙な霰」という論文がある。カンハイ

ヤラルなる人物がラホール（現パキスタン）から投稿したもの<sup>20</sup>で、イギリス植民地下のインド人が執筆したものと考えられる。友人から聞いた話だとして、数日前にペシャワールのダデュザイという村で嵐があり、霰が降った。しかし、まったく冷たくなく、食べると砂糖の味がしたというものである。あまりにも怪しげな内容であり、聖書のマナをすら思わせる。現在の『ネイチャー』では、およそお目にかかれなような論文であろう。しかし、こういったアジア発の記事が19世紀末の『ネイチャー』には散見される。前述のインドのコブラに関する話題なども、通じるものがあるだろう。

熊楠も1894年5月24日号の「蛙の知能」で、蛙は地理感覚に優れており、もとの場所に帰ってくるから日本語で「かえる」と呼ばれるのだとの説を紹介したり、1895年6月27日号の「網の発明」で、中国にはクモの巣を見て網が発明されたという伝説があると述べたりしている。ただし、熊楠自身がそう信じていたわけではなく、古典籍の記述を紹介しているのであり、また西洋の科学者の説にからめて論じることかちをとっている。

ロンドン時代に熊楠が投稿した論文はすべてが掲載された。しかし、帰国後は『ネイチャー』から謝絶される例が出てくる。「日本の記録にみえる食人の形跡」（1903年3月17日発送）、「燕石考」（1903年4月3日発送、6月26日返送）、「ペルー海岸に漂着した日本人遭難者」（1912年9月17日発送、10月7日付謝絶状）、「花粉を運ぶコウモリと鳥」（1913年4月2日発送、4月22日付謝絶状）、「石、真珠、骨が増えるとされること」（1913年4月9日発送、5月5日付謝絶状）の5篇である。

このうち「日本の記録にみえる食人の形跡」は、未発表に終わったものの、熊楠の代表作のひとつとされる力作である。日本にカニバリズムがあったことを例示する内容で、ロンドン時代末期の1900年3～6月に執筆され、『ネイチャー』に投稿するつもりでいた。ところが、周囲のイギリス人（おそらくロンドン大学事務局長も務めた日本学者のF・V・ディキンズ Frederick Victor Dickins, 1838-1915）らの反対により、とりやめたらしい。しかし、あきらめきれなかったようで、帰国後の1903年にリライトして『ネイチャー』と『サイエンス』に投稿する。しかし、いずれからも謝絶された。

草稿が現存しており、モースが大森貝塚で発見した「食人の痕跡」にまつわる論文だったことがわかっている。モースは1880年前後に、日本にカニバリズムがあったとの論文を『ネイチャー』などに発表した。誌上でデイキンズらと論争となり、結局、否定された。<sup>21</sup> 「日本の記録にみえる食人の形跡」は、モースに味方し、日本の歴史上からいくつも実例を示してみせる。『日本書紀』の大飢饉に際して食人が行なわれた記録、酒呑童子、『雨月物語』の死んだ愛童の肉を食らう老僧、『今昔物語集』の皮膚病の薬に胎児を用いた例などである。ただし、モースが習俗としてのカニバリズムを論じたのに対し、熊楠は突発的な事件にかざられている。

編集部が「日本の記録に見える食人の形跡」を掲載しなかった理由はわかっていない。謝絶状には定型の文言が並んでいるだけである。ただ、すでに決着の付いた議論だったこと、例外的な事件ばかりなこと、あまりにも長大だったことなどが考えられる。さらに、そもそもアジアの不思議な話が許容されなくなっていた可能性がある。20世紀に入って『ネイチャー』（そして、もしかしたら科学そのもの）は急速に変質していく。現代的な科学論文の割合が増加し、「最先端の科学」が活発に論じられるようになる。それともなって熊楠は活動の場を移さざるを得なくなり、人文科学系の『ノーツ・アンド・クエリーズ』を主戦場とするようになっていく。『ネイチャー』には在英時に39篇が出たのに対し、帰国後は12篇に留まり、1914年には投稿をやめてしまう。

## 7. 『ネイチャー』における熊楠と日本、アジアの位置づけ

本稿では、まず熊楠の「東洋の星座」をとりあげ、ロッキヤーや誌面での古天文学への関心、投稿欄における質疑応答について確認した。熊楠の論文が『ネイチャー』で価値をもったのは、日本や中国の科学史を、古典籍を利用して紹介できたためであった。

つづいて投稿欄と彙報欄について分析した。従来から広く知られていたのは投稿欄であり、熊楠も主としてこちらを利用した。一方の彙報欄は編集部がまとめるもので、頁数も多く、より多くの情報が掲載された。情報源もさまざまで、現地の雑誌や新聞、アジア帰りの研究者の講演、書籍の

紹介などが見られる。これまで彙報欄が注目されることはなかったが、日本／アジアの科学は、こちらを通してさかんに伝えられており、少なくとも本稿で扱った時期においては、より豊かであったとすらいえる。投稿欄だけ見ていたのとは、まったく違った世界が示せたであろう。2つの欄を合わせたものが、ヴィクトリア時代末期に『ネイチャー』によってイギリス科学界、そして多くの一般読者へ伝えられていた、アジアの「科学」ということになる。

日本の場合には、お雇い外国人という存在が見逃せない。彼らがもちこんだ知識や技術によって日本の近代科学が発展したことは知られているが、同時に日本の情報をイギリスに伝える役割もはたしていたのである。こうしたお雇い外国人にまつわる話題は1870年代から誌面に出ており、日本に関する関心も醸成されていったと考えられる。熊楠についても、その流れのなかで考えなくてはならない。

19世紀末の『ネイチャー』は、このような空間だったのである。投稿欄と彙報欄があり、投稿者も専門の科学者からアマチュアまで幅広かった。『ネイチャー』は科学者たちによる最新の研究成果の発表の場というだけでなく、むしろさまざまな科学にまつわる情報や人材の結節点となっていたと見なした方がしっくりくるのではないか。

さて、最後にアジア人投稿者について改めて見ておきたい。本稿で扱った時期の『ネイチャー』には、アジア人投稿者は熊楠と、インドのカンハイヤラルの2人だけが確認される。1893年8月31日号の投稿欄に出たカンハイヤラルの「数学者へのアピール」は、長年にわたって『ラーマーヤナ』を研究してきたことから語り始め、従来の年代考証の不正確さに苦言を呈す。そしてエジプト学者たちが彗星や日食の記録をもとにした「天文学的方法」で、ファラオたちに関する年代特定に成功している例を挙げ、古代インド史にももっと「数学的な天文学」をもちこむべきだと主張する。たとえばラーマ王子が誕生したときの月、太陽、水星～土星の位置はわかっているのだから、専門の心得のある数学者に計算してほしいと述べる。<sup>22</sup>

これもあきらかにロッキヤーの影響を受けた投稿なのである。「奇妙な叢」もそうであったが、熊楠と似たような問題関心をもっていた点が興味深い。イギリスが植民地を拡大し、また科学が世界へと広がっていくなか

で、熊楠や彼に似たアジア人があらわれた。科学の網の目のなかにアジアもくみこまれていったのである。

### 注

- 1 『ネイチャー』の日本特派員だったアラン・アンダーソンの算出による。『朝日新聞』2005年1月15日夕刊。
- 2 松居竜五・小泉博一「南方熊楠の『ネイチャー』掲載論文について」『国際社会文化研究所紀要』6号，龍谷大学，2004年／松居「『東洋の星座』再考」『異端者たちのイギリス』志村真幸編，共和国，2016年／松居『南方熊楠——複眼の学問構想』慶應義塾大学出版会，2016年，第Ⅵ章。
- 3 拙稿「南方熊楠と『ネイチャー』誌における天文学——「東洋の星座」投稿をめぐる」『異端者たちのイギリス』／拙稿「南方熊楠と『ネイチャー』——「東洋の星座」掲載をめぐる」『歴史文化社会論講座紀要』13巻，京都大学人間・環境学研究所歴史文化社会論講座，2016年／村岡健次「南方熊楠投稿時代（一八九三～一九一四）の科学雑誌『ネイチャー』の性格」『熊楠研究』11号，2017年。
- 4 たとえば、下記を参照のこと。  
Kapil Raj, *Relocating Modern Science: Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650-1900*, Basingstoke & New York, Palgrave Macmillan, 2007.
- 5 「東洋の星座」の執筆過程については、松居「『東洋の星座』再考」に詳しい。
- 6 原資料より翻字。平凡社版『南方熊楠全集』では、7巻13頁。
- 7 拙稿「直筆で読む南方熊楠——「履歴書」を解説する」『kotoba』19号，集英社，2015年，41頁。
- 8 「タイムス」とあるのは、『マンチェスター・タイムズ』に「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」が紹介されたのと混乱していると思われる。松居「英国の新聞記事から見る南方熊楠のロンドン時代」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』15号，2013年，156頁。
- 9 11月14日の日記に「今夜、インペリアル・インスティテュートにて、印度学会夜会より招待状を送られしが、風雨等にて行を果さず」とある。
- 10 拙稿「南方熊楠と『ネイチャー』」89-90頁。
- 11 Norman Lockyer, 'The Early Asterism I', *Nature*, October 12, 1893, p. 439.
- 12 『南方熊楠英文論考[ネイチャー]誌篇』飯倉照平監訳，松居竜五・田村義也・中西須美訳，集英社，2005年，27-36頁。
- 13 熊楠において、伝播説と独立発生説はそのときどきによって揺れ動き、一

- 定しない。松居『南方熊楠』第Ⅷ章「フォークロア研究における伝播説と独立発生説」を参照のこと。
- 14 日記によれば、8月30日に「ネーチュールへの答弁稿成」と原稿を完成させ、投稿している。
  - 15 Norman Lockyer, *The Dawn of Astronomy: A Study of the Temple-worship and Mythology of the Ancient Egyptians*, Cassell and Company, 1894, p. 4.
  - 16 『[ネイチャー] 誌篇』28頁。
  - 17 拙稿「南方熊楠と『ネイチャー』誌における天文学」489-501頁。
  - 18 関東大震災後には、『ノーツ・アンド・クエリーズ』の編集者から、熊楠のもとに安否を尋ねる書簡が届いたこともあった。
  - 19 拙稿「まえがき」『南方熊楠英文論考[ノーツ アンド クエリーズ] 誌篇』飯倉照平監訳、松居竜五・田村義也・志村真幸・中西須美・南條竹則・前島志保訳、集英社、2014年、10頁。
  - 20 投稿の日付は6月20日。3週間あまりで掲載されたことになる。
  - 21 この一連の議論については、下記が詳しい。  
E・S・モース『大森貝塚 付関連史料』近藤義郎・佐原真編訳、岩波書店、1983年。
  - 22 Kanhaiyalal, 'An Appeal to Mathematicians', *Nature*, August 31, 1893, pp. 415-416.

— 慶應義塾大学兼任講師

## Summary

### The Scientific Network between Asian Countries and England: MINAKATA Kumagusu and *Nature*

Masaki Shimura

In 1893 MINAKATA Kumagusu contributed an essay to the journal *Nature*, entitled “The Constellations of the Far East”. Special attention had been paid by Norman Lockyer (the founder of *Nature*) and subscribers. Lockyer is among the pioneers of archaeoastronomy. He wrote many articles on this subject. Kumagusu’s contribution was one of the replies to them.

In *Nature*, I found many articles about Asian science and technology. Most of them appeared in miscellany notes. During the Meiji period, the Yatoi played an important role. The Yatoi were foreign advisors hired by the Japanese government for their expertized knowledge to assist in the modernization of Japan. *Nature* reported their scientific activities, especially on earthquake and volcanic eruption.

There are some notes about India, China and other Asian countries. By the end of 19th century, the Western modern science was widespread. *Nature* constructed the scientific network between Asian Countries and England.

